

研究者のウェルビーイング

— 対人関係がパフォーマンスと精神健康に与える影響 —

近藤（有田） 恵

（京都大学こころの未来研究センター 特定研究員）

大石 高典

（京都大学こころの未来研究センター 特定研究員）

内田 由紀子

（京都大学こころの未来研究センター 助教）

平石 界

（京都大学こころの未来研究センター 助教）

2010 年 1 月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

1.問題と目的

研究者が一人の人間として、その生を充実させる上で重要なものは何か。人の人生を充実させる要素は様々であるが、研究者という枠組みの中でその要素を考えると、1.研究業績、2.研究室を中心とした人間関係、3.私生活の充実が挙げられるだろう。特に、研究者を目指す20代前半から一般的に研究者としての職を得る30代半ばまでは心理学的にみても重要な時期である。

後期青年期（18歳から20代前半）は、安定した自己評価（自身の客観的現実的自己評価）ができるようになることで、適度な妥協や欲求充実の遅延が可能になり、現実的充足が得られるようになる時期である（高尾,1993）。すなわち、自己と他者の自己評価がある程度重なることにより、安定した自己が確立され、そのことが個人の幸福感につながるといえる。また、成人期前期（20代後半から40歳）は、職業生活・結婚生活・社会生活にわたって一人前の働きが求められる時期であり（高尾,1993、ハヴィガースト,1953/1958）、また、他者との親密性の形成の時期でもある（エリクソン,1959/1973）。研究者は、一般的発達に挙げられる1.職業生活、2.結婚生活、3.社会生活、4.他者との親密性の形成といった重要な時期を、大学そして研究室という特異な環境で過ごすことになる。この時期は職業生活に向けた学位取得や就職活動、他者との親密な関係を形成する結婚などの大きなライフイベントが集中する時期でもあり、研究者としての職業生活の基盤の形成と私生活の間で生ずる葛藤や困難を若手研究者は解決していかななくてはならない。研究者にとっての社会生活の中心は、大学及び研究室であり、研究室内の人間関係は、研究業績に代表される直接的な研究の成果だけではなく、心理的発達や人生観、人間観にも大きな影響を及ぼしていると考えられる。すでに京都大学男女共同参画企画推進委員会（2008）が報告しているように、特に女性研究者が研究者としての職業生活をする上で、結婚、出産、子育てとの継続を考えると、研究室を含めた対人関係は重要な意味を持つ。

これまでの心理学研究では、仕事などで充実することにより自尊感情を持つことと、良好な人間関係を持つことの双方が、人生の満足や幸福、健康など、心身両面のウェルビーイングに肯定的な効果をもたらすことが示されてきている。自尊感情に関していえば、一般的な自尊心の高さ(Diener & Diener, 1995)や目標達成(Emmons, 1986)が人生の満足感をもたらすなど、多くの研究が行われている。他方、「関係性に満足している」という主観的な認知も幸福感をもたらす（Ryan & Deci, 2000; Ryff & Keyes, 1995）、関係性から阻害されていることは健康を阻害することが知られている（Cacioppo, Hawley, & Bernston, 2003）。この理由の一つは、対人関係がストレス等の対処方略や人間の基礎的欲求である社会関係とのつながりを確認することのできる「ソーシャル・サポート」をもたらすからであると指摘されている（Cohen & Willis, 1985; Uchino, Cacioppo, & Keicolt-Glaser, 1996; Uchida, Kitayama, Mesquita, Reyes, & Morling, 2008）。

そこで、本研究では生涯発達心理学上重要な時期とされる後期青年期から成人前期の課題をもとに、研究者のウェルビーイング（ウェルビーイング;幸福観）には何が影響しているのかについて測定した。先行研究より、研究者の幸福感を構成する要素として、1.仕事における充実感と2.他者との親密性が挙げられ、両者は互いに関係していると考えられる(Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995)。研究活動の場である研究室は、しばしば擬似的な「家族」としてみなしうるほどの親密な人間関係を形成するが、こうした親密な人間関係は、心的サポートにもなりうる一方で、差別やハラスメントを生み出し、ストレス原となる危険性もはらむ（厚生労働省, 2002）。本研究では、特に若手研究者に着目し、研究室というネットワーク資源を研究面、私生活でどのように活用することが、幸福観に貢献しているのかについて、男女の違いや共通性等を量的、質的に明らかにすることを目的とする。

2.質問紙調査（量的研究）

（1）目的

若手研究者のウェルビーイング(幸福感)にはさまざまな要因が影響すると考えられる。質問紙調査では、こうした要因を定量的に検討した。若手研究者の幸福に影響する要因をシステムティックに分析を行った先行研究は、我々の知る限り存在しない。そこで本調査では、一般に幸福感に影響すると考えられる変数を網羅的にアンケートにより尋ねることで、探索的な調査を行った。具体的には、幸福感には「研究業績」「他者との関係性」そして「本人の性向」が影響することが考えられた。

研究者としての職や研究費の獲得において、研究業績が大きな影響力を持つことから、未だ特定の職を獲得していない若手研究者において、研究業績はその幸福感に大きな影響を与えることが予測される。一方で、若手研究者といえども、20代～30代前半の青年期、成人期を生きる人間であることに変わりはなく、この時期の人々の幸福感に大きな影響力を持つ他者との関係が、その幸福感に影響を与えることは、十分に予測可能である。また、一般に幸福感にはパーソナリティが影響することが知られている（DeNeve & Cooper, 1998; Hayes & Joseph, 2003）。「研究業績」や「他者との関係」が幸福感に与える影響を検討するにあたって、こうしたパーソナリティの要因を統制する必要がある。

そして「研究業績」と「他者との関係性」は、しばしば「仕事」と「プライベート」という形で、トレードオフの関係を持つことがある。他者との関係性の充実のために、研究のための時間やエネルギーが割かれること、またはその逆といったことが、若手研究者の幸福感にどのような影響を与えうるのか検討することも、ワークライフバランスの観点から重要だろう。

加えて、若手研究者のこれまでの人生や、これからの研究者としての将来についてのヴィジョンも、幸福感に影響を与えることが予測される。過去のライフイベントや将来像の

与える影響について、定量的に分析することは容易ではないだけでなく、必ずしも適切ではないかもしれない。そこで、これら点については自由記述による回答を求め、アンケート調査と共に検討することで、定性的な分析を試みた。

(2) 方法・分析

A. 質問紙の構成

若手研究者の幸福感に影響を与えうる独立変数として、大きく「研究業績」「他者との関係性」「パーソナリティ」の3つの次元を検討した。具体的な質問項目は以下の通りであった（質問紙の全容については筆者に問い合わせのこと）。

a. 研究業績

公刊されている研究業績の数を尋ねた。具体的には著書の数（単著・共著・分担執筆）、論文の数（査読論文・査読なし論文・紀要・科研費報告書）を尋ねた。

b. 他者との関係性

若手研究者に重要と考えられる社会関係として「家族」「研究室」そして「(配偶者などの) パートナー」を取り上げて尋ねた。家族については、家族構成に加え、家族内に研究者がいるかどうかも回答してもらった。研究室については、研究室のメンバー構成だけでなく、研究スタイル（共同研究か単独研究か）、主たる研究場所（研究室・フィールド・実験室・自宅）、主たる研究場所における滞在時間などを尋ねた。「パートナー」については、現時点におけるパートナーの有無に加え、パートナーとして研究者を望むか否か、選択形式での回答を求めた。

他者との関係性が幸福感に与える影響をより厳密に検討するために、家族関係や研究室の人間関係の良し悪しを尋ねることも検討された。しかし、京都大学のスタッフによる、京都大学所属の若手研究者の調査であるという点を鑑みると、プライベートに深く関わる調査を行うことには慎重であるべきと判断し、今回の調査には含めなかった。

c. パーソナリティ

DeNeve & Cooper (1998) によるメタ分析から、パーソナリティ心理学において主流である Big 5 と呼ばれるパーソナリティ次元のうち、「外向性 (extraversion: E)」「神経質さ (Neuroticism: N)」「愛想の良さ (Agreeableness: A)」の3次元が幸福感に影響することが明らかになっている。そこで Big 5 パーソナリティ尺度として利用頻度の高い NEO パーソナリティ尺度 (Costa & McCrae, 1992) の短縮版 (NEO-FFI) の日本語版 (Yoshimura et al., 1998) から、上記3次元を実施した。そもそもの NEO-FFI では、「神経質さ」「外向性」「開放性」「愛想の良さ」「誠実性」の各次元から1項目ずつが、この順で提示される。各次元ごとに12項目があるので、全60項目からなる質問紙となっている。本調査では、

この60項目から「開放性」と「誠実性」の2次元の項目を抜いた36項目を実施した。上述の2次元の項目を除く以外には、項目の提示順に変更は加えなかった。

d.ワークライフバランス

日々の生活の何にどれだけのエネルギーを割いているか、そして理想のエネルギー配分はどのような形になるのか、自由記述により回答を求めた(図1)。



図1 ワークバランス記入例

e.人生と将来像

これまでの人生における重要なライフイベントを10項目自由記述により回答を求めた上で、それを参考にしつつ、これまでの人生およびこれからの人生において、ライフイベントと感情状態の変化を自由記述により回答することを求めた(図2)。ライフイベントと感情状態の変化を作成する図は、川瀬・松本(1997)の「私の感情曲線」を参考にし、リタイアまでの感情変化と感情変化を引き起こす出来事を記述してもらった。また、理想の研究者像を5つ、自由記述により回答を求めた。

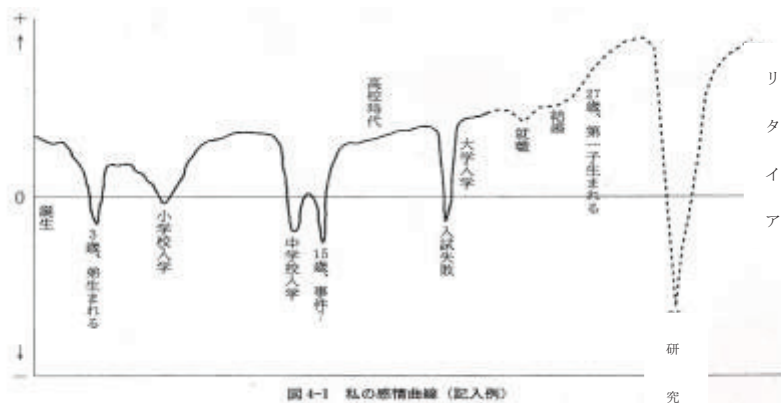


図2 感情曲線記入例

f. 幸福感

若手研究者の幸福感を測定する従属変数としては、ローゼンバーグの自尊心尺度 (Rosenberg, 1965) ならびに感情状態尺度 (Uchida, et al., 2008 参照) を用いた。感情状態尺度は、普段の感情状態について、「ポジティブ感情」「ネガティブ感情」「身体症状」の三次元により問うものであった。自尊心得点とポジティブ感情得点は高いほど、ネガティブ感情得点と身体症状得点は低いほど、ウェルビーイングは良好であると考えられた。

B. 調査対象者

京都大学に所属する研究者 39 名 (性別無記入 1 名を含む) が調査に回答した (男性 23 名、女性 15 名; 22~39 才, 平均 27.08 才, SD 4.07)。専門領域および身分は表 1 から表 3 の通りであった。本調査は、大規模調査の予備調査として行ったため、あえて修士課程、博士課程に在籍している研究者を目指す者を中心に行った。

表 1 : 調査協力者専門領域分布

専門領域	総合・新領域	人文社会系	理工系	生物系
人数	7	20	5	7

表 2 : 調査協力者身分分布

身分	修士課程学生	博士課程学生	PD・研究員	助教	その他
人数	12	12	4	2	1

表 3 : 調査協力者研究スタイル分布

研究スタイル	個人研究	共同研究	半々
人数	30	4	5

C. 質問紙の配布と回収

質問紙は封筒に入れて配布されるか、PDF ファイルによって電子的に配布された。回答は、無記名の封筒に入れて学内便または回答者本人の手渡しによって返却された。

(3) 結果と考察

各心理尺度は、先行研究にしたがって得点化された。それぞれの心理尺度の回答の信頼性 (クロンバックの α) は表 4 の通りであった。全て 0.7 を上回る値であり、回答の内的信頼性は高かった。

表4：心理尺度の信頼性

心理尺度	α
自尊心	0.83
神経質	0.84
外向性	0.85
愛想の良さ	0.75
ポジティブ感情	0.83
ネガティブ感情	0.90
身体症状	0.74

A 業績数と幸福観について

研究者の幸福観を構成する要素の1つであると考えられる業績数について、業績数と自尊心、ポジティブ感情、ネガティブ感情の相関を求めた。業績数としては、論文数、著書数などの回答を単純に合計したものを「業績合計」として計算した。表5に示した通り、業績の多さが自尊心を高めたり、ポジティブな感情を呼び起こすことにあまり関係しない傾向にあることが示唆された。ただしこの背景には、まだ業績数の少ない修士課程学生が回答者に多く含まれていたことが影響した可能性がある（表2）。実際、業績合計の得点分布には偏りが見られた（図3）。業績がウェルビーイングウェルビーイングに与える影響については、さらなる検討を要するだろう。

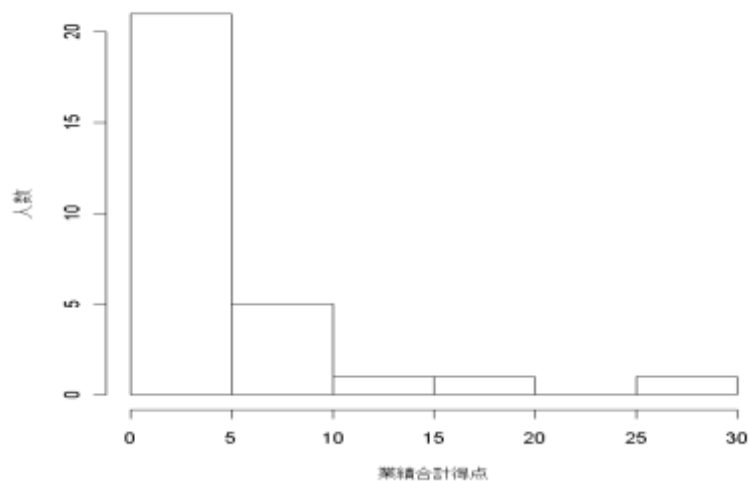


図3：業績合計得点の分布

表5：ウェルビーイングウェルビーイングと業績、研究室人数、パーソナリティの相関係数

	自尊心	ポジティブ感情	ネガティブ感情	身体症状	業績合計	研究室人数	D4以上人数	神経質さ	外向性
自尊心	-								
ポジティブ感情	0.578* **	-							
ネガティブ感情	-0.608* **	-0.534* **	-						
身体症状	-0.668* **	-0.5***	0.754* **	-					
業績合計	0.1	-0.077	-0.038	0.042	-				
研究室人数	-0.321	-0.136	0.039	0.122	-0.4+	-			
D4以上人数	-0.481* **	-0.284	0.247	0.381+	-0.333	0.646* **	-		
神経質さ	-0.791* **	-0.479* *	0.717* **	0.717* **	-0.147	0.212	0.377+	-	
外向性	0.233	0.19	-0.372* **	-0.316* **	-0.004	-0.007	-0.242	-0.156	-
愛想の良さ	0.795* **	0.527* **	-0.445* *	-0.601* **	-0.145	-0.25	-0.402* **	-0.594* **	0.287+

+ p,.1 * p<.05 **p<.01 ***p<.001

その一方で、研究室内の人間関係からみると、就職をしていないD4以上の学生の人数が多い研究室の人は自尊心が低いという結果がでた。ただし自尊心はパーソナリティ尺度の得点とも強く相関していた。パーソナリティとD4以上学生数の自尊心への影響を多重比較すると、D4以上学生数の影響力は有意でなかった。しかし一方で、ある研究室におけるD4以上学生数と、そこに所属する学生のパーソナリティのあいだに、どのような因果関係が存在するかは明らかでない。今後データを追加することで、より詳細な統計分析を行う必要があるだろう。

B 研究スタイルと幸福観

次に、研究スタイルと自尊心、ポジティブ感情、ネガティブ感情の関係について検討した。研究スタイルとして「ほとんど共同研究」または「ほとんど個人研究」という回答を「大きな研究スタイルの偏り」とし、「共同研究が多い」「個人研究が多い」を「中程度の研究スタイルの偏り」、「共同研究と個人研究が半々」という回答を「小さな研究スタイル

の偏り」として、研究スタイルの偏りによるウェルビーイングへの影響を、性別の影響と併せて分散分析した（図4参照）。研究スタイルの偏りの主効果が、全ての分析において有意または有意傾向を示した。すなわち、個人研究のみや共同研究のみを行っている、研究形態に偏りのある人に比べて、個人研究と共同研究をバランスよくおこなっている人のほうが、ポジティブ感情が高く（ $F(2)=4.37, p<.05$ ）、ネガティブ感情が低く（ $F(2)=4.82, p<.05$ ）、ネガティブな身体症状が少なかった（ $F(2)=7.53, p<.01$ ）。また、自尊心についても、有意ではないものの、研究スタイルの偏りが影響する傾向が見られた（ $F(2)=2.93, p<.1$ ）。性別の主効果、研究スタイルと性別の交互作用は、いずれの分析においても有意でなかった。

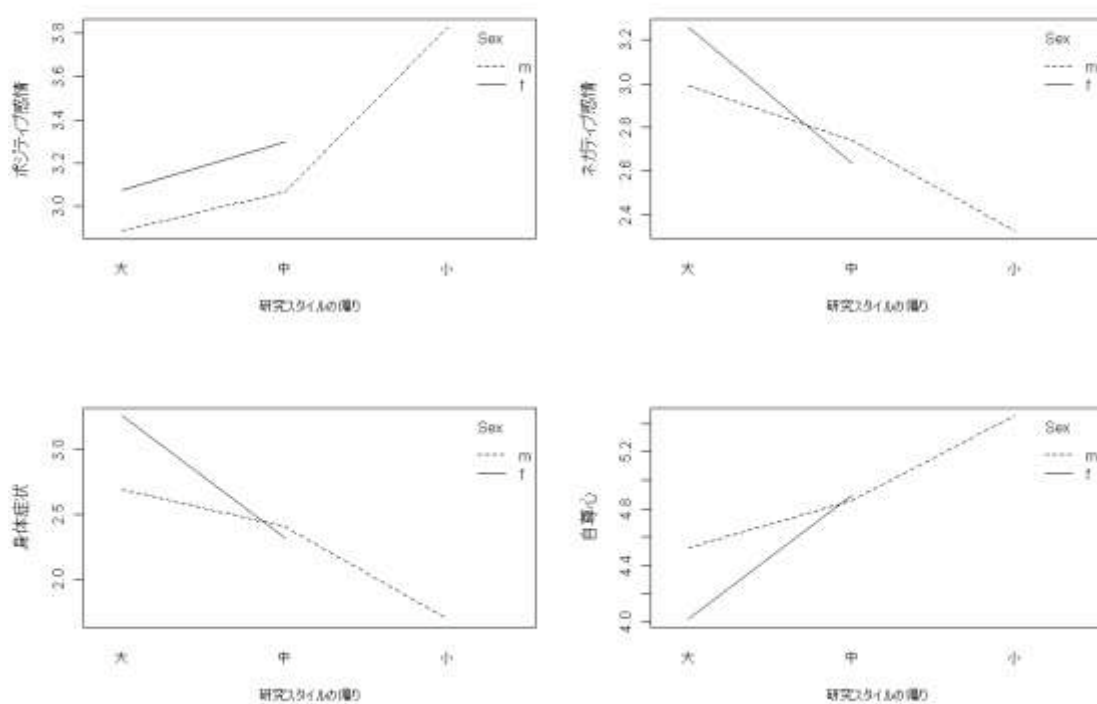


図4：研究スタイルと Well-being（性別ごと）

図4に研究スタイルがウェルビーイングに与える影響を性別ごとに示した。個人研究のみ、共同研究のみといった研究スタイルに偏りのある若手研究者では、ウェルビーイングが低くなる影響が見られた。

C パートナーと性別の交互作用

親密な他者との関係が幸福感にどう影響するのかという点について、男女差を比較した。親密なパートナー（配偶者または交際相手）の有無による、自尊心、ポジティブ感情、ネ

ガティブ感情、身体症状の平均値を男女別にみると、女性研究者の場合、パートナーの有無がウェルビーイングに影響する傾向が図から見て取れた。すなわちパートナーがいる人の方がポジティブ感情と自尊心が高く、ネガティブ感情と身体症状が低いという傾向が見られた（図5）。一方、男性研究者の場合は、パートナーの有無による差がほとんど見られなかった。ただし4つの心理尺度（ポジティブ感情・ネガティブ感情・身体症状・自尊心）へのパートナーの有無と性別の交互作用を分散分析した結果は有意ではなかった。統計検定が有意とならなかった原因の一つとして、今回の調査では、パートナー有りの回答者数に性別による偏りがみられたことが考えられる（表6）。今後、サンプル数を増やした上での再検討が必要だろう。

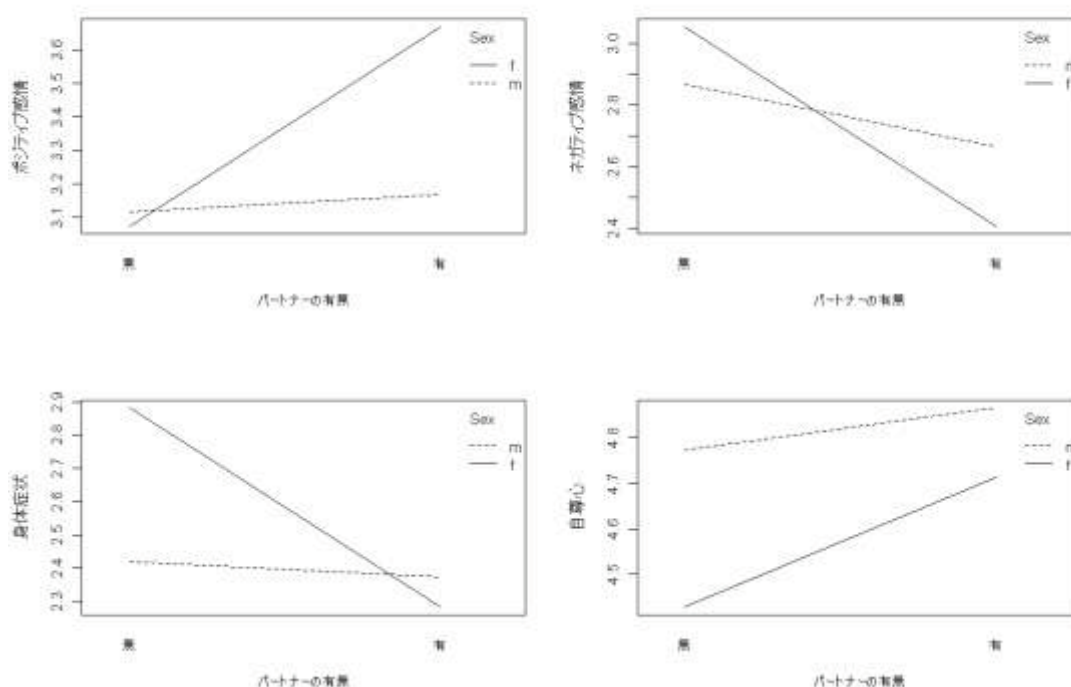


図5：パートナーの有無と性別がウェルビーイングに与える影響.

表6：性別とパートナー有無のクロス集計（人）

	パートナー有	パートナー無
男性	13人	10人
女性	12人	3人

D ワークライフバランス

研究者が日々の生活で何にどれだけのエネルギーを割いているのか、また、理想のエネルギー配分はどのようなものになるのかについての自由記述においては、さまざまな項目が挙げられた。例えば、記入例（p.4 図1 ワークバランス記入例を参照）に挙げた「研

究」「教育」「家庭」「その他」の他に、「友人付き合い」「家事」「趣味」などの項目を挙げた回答者が見られた。回答者ごとに、エネルギーを割く対象とした挙げた項目が異なるために、数量的な分析を行うことは困難であると判断された。本調査では、エネルギーを割く対象を研究者側で特定した上で、記入を求める形とすることが望ましいだろう。

E 人生と将来像について

これまでの人生における重要なライフイベントの想起を参考に、ライフイベントと感情状態の変化からは、過去のライフイベントにおいては様々な項目があげられ、必ずしも研究生活と直結するものに限られたものではないことがわかった。その一方で、現在や未来については、結婚や子どもを持つ計画があげられ、生涯発達心理学の青年期から成人期における課題とも一致し、研究の充実、研究成果と共に、私生活における充実も視野にいれていることが示唆された。さらに、興味深い点としては、就職についてはプラス感情として捉えるだけでなく、マイナス感情として捉える協力者もあり、就職が必ずしもプラス感情にならないという点が興味深い点であった。

3 インタビュー調査（質的調査）

（1）目的

京都大学に在職している研究者を対象とした勤務形態やハラスメントについての量的研究はすでに行われているが（例えば、京都大学女性教員研究状況調査報告,1996、落合,2008）、本研究の目的で挙げているような研究室をはじめとする親密性を中心とした聞き取り調査についての先行研究は皆無である。また、研究上の悩みや研究室内の人間関係といった点については、量的研究の項で述べたように協力者のプライベートに深くかかわる範囲であることから、なかなか質問紙では探ることが難しい。このような点から、本調査では、インタビュー調査を用いて、親密性と研究状態についての調査を行った。具体的には、協力者の現状をより引き出すために、1.研究室の構成と人間関係、2.指導教官との関係、3.今後の研究生活についてという大まかな設問をたて、自由に語ってもらう半構造化面接を行った。

（2）方法・分析

A. 対象 京都大学在学中の大学院生

協力者は先述した調査紙を配布する際にインタビュー協力のチラシを同封し、質問内容などを説明した上で協力を得られた人。今回は、協力者が大学院生であることから、個別インタビューよりも、グループインタビューの方が協力者の話が聞き出せると考えられたため、グループインタビューを行った。協力者は人文社会系専攻の4名（男性1名、女性3名；平均年齢 24.25 歳）で、基本的には個人研究を行っていた（内訳は表7参照）。

修士課程の協力者たちは、博士課程進学を目指す人々であり、今回の教職者は若手研究者と位置づけることができる。

表 7：調査協力者身分分布

身分	修士課程学生	博士課程学生
人数	3	1

B. 方法及び倫理的配慮

インタビューは京都大学こころの未来研究センターの研究室にて、約 2 時間のグループインタビューを行った。インタビューに際しては、インタビューの内容は個人が特定されないよう加工された上で、論文や発表に使用すること、インタビュー内容を録音することへの許可を得て、録音し、終了後、テープ起こしを行った。

(3) 結果と考察

A. 研究室の構成や人間関係について

研究室の形態は、所属している研究科、講座によって様々であるが、今回の協力者たちが在籍している研究室の形態は以下の通りである。

表 8：研究室形態（人数）

院生室	有（4）	無（0）
部屋割り	修士～PD 同室(2)	PD 別室(2)
個人机	有（3）	無（1）

院生室の使用について、自分専用の机を持つ協力者はほぼ毎日研究室を利用するが、専用机のない協力者は、研究室でしかできない仕事（パソコンに入っているソフトを使用する時など）をする時のみ研究室を利用する形になっている。研究室内での人間関係については、飲み会などを定期的に行っているものの内容は研究のことが主で、特に親密な関係を築いているわけではなかった。以下、インタビュー時の発話は、個人が特定されないよう加工した上で掲載する。

<研究室内の人間関係に関する語り>

- ・研究室に人があまりいない（M2 男性）。
- ・研究上のつきあいだけに終始（M2 女性①、D1 女性）。
- ・異性つきあいで問題がある男性 PD がいて、女性はその人と二人きりにならないよう工夫している（M2②女性）。
- ・PD と部屋が別なので、PD の置かれている状況がわからない（M2 女性①、D1 女性）。

B. 指導教官との関係

研究室内の対人関係では、同じ身分である院生同士あまり新密な関係を築いていないことに関しての不安などは聞かれなかったが、指導教官との関係の取り方については、研究指導を含めて、関係の取り方が大きく異なった。

<指導教官との関係について>

- ・基本的に研究に関しての指導はあまりなく、自由にやらせてもらっている。他大学の先生との研究が今はメインになっている。研究の話のみ（M2 女性①、D1 女性）。
- ・特定の指導教官はいないので、ある意味自由（M2 女性②）。
- ・指導教官と意見が食い違くと他に指導を仰げる人がいないところがしんどい（M2 男性）。
- ・就職に関して、指導教官が院生と個別に相談を行うことがないので研究室内の人間関係には影響がない（M2 女性①・②、D1 女性）
- ・就職、進学などについて、指導教官と個別に話が進められるので、院生同士腹の探り合いになる（M2 男性）。

研究に対して、学生に自由を与える指導教官の下にいる協力者や一人の指導教官を持たない協力者に対して、一人の指導教官の下で研究内容を縛られている協力者はその精神的負担を語っている。また、就職や進学に対して学生と一対一で話を進める指導教官の下にある研究室の場合、院生同士が新密な関係を形成する上妨げになる可能性があることが示唆された。

C. 今後の研究生生活について

すでに指摘されているように研究者としての就職が難しくなっている現状についての問いには、次のような語りが見られた。

<今後の研究生生活について>

- ・博士課程に進学しても、公務員試験など研究者以外の道もまだ残している（M2 男性、M2②女性）。
- ・研究室の先輩を見ていて、博士論文を書けば研究職、学振 PD,非常勤があるのでなんとかなると思う。（M2 女性①・②、D1 女性）
- ・社会人の多い研究室の場合、博士進学後も職があるので、研究室の先輩はあまり参考にならない（M2 男性）。
- ・保証がないのに、博士課程に進学しても大丈夫かと思う（D1 女性）。
- ・就職についてはまだリアリティがない（M2 女性①・②、D1 女性、M2 男性）。

博士課程の協力者からは将来に対して若干の不安が見られたが、PD や期限付きのポストについている人が持つ切迫感に比べると比較的、将来に対して楽観的に見ているといえる。また、博士課程への進学を希望するからといって研究職だけを目指すのではなく、職業選択として他の選択肢を持っていることも明らかになった。

総合考察

本年度は、主に「研究室内の対人関係と幸福感」という観点から予備調査を行った。若手研究者を対象に質問紙調査を行い、【自尊心、幸福度、研究上の価値観や理想の研究者像、ワークバランス、性格特性、研究室の人数構成や被験者の家族構成】の各項目について、複数部局に在籍する計 36 名から回答を得た。また、研究室における人間関係の実態についてグループインタビューを行い、個別事例の検討を行った。質問紙調査からは、1) 業績数が必ずしも若手研究者の自尊心につながらないこと、2) 個人研究だけ、共同研究だけに偏らないことが、感情状態に良い影響を持つこと、3) 配偶者などのパートナーの存在がポジティブな感情を呼び起こす傾向があること、その傾向は女性研究者でより顕著であることなどが示唆された。特定の他者との「親密」な関係の形成が研究者の感情生活に重要な意味を持つことは、生涯発達心理学の観点からも首肯できる。グループインタビューの参加者らは、研究室において必ずしも「親密」な関係を築いているわけではなく、むしろ、奨学金獲得や就職、博士号取得に大きく関係する研究指導を介しての指導教官との対人関係が、若手研究者の研究室への関与のあり方や精神健康に大きな影響を与えていることが示唆された。例えば、指導教官以外の教官や研究者との連携や交流をとり易い環境にいる研究者に比べ、指導教官や上司との一対一の関係以外に交流の少ない環境にいる若手研究者は、指導教官以外の研究室構成員と、研究上の悩みを共有することが困難であったり、「親密」な人間関係を結びにくいことを指摘していた。

今回は、京都大学大学院の修士課程、博士課程に在籍中の者についての調査であった点、また、調査サンプルが限られており、この結果を一般化することはできない。たとえば、業績数と自尊心の関係などは、協力者の身分や立場、研究分野によって与える影響は異なるであろう。研究者としてなにかの職を得るという点については、PD や任期付きのポストに在職している者と大学院在籍中の者では、切実さにも差があるだろう。また、京都大学のようにGCOEや外部研究費を多く獲得している大学においては、任期付きといえども大学院修了後につけるポストがあり、研究者としての安定した職を得るまでに一定の猶予があるのに対して、外部研究費の少ない大学においては大学院修了後に研究職に就くことが難しい状況もある。今後は、調査対象者数を増やすとともに、直接観察や個別事例の社会学的分析など多角的な研究手法を取り入れて研究者の幸福感の実態について明らかにし、より一般的な見解を提示したい。

引用文献

- Cacioppo, J. T., Hawkley, L. C., & Bernston, G. G. (2003). The anatomy of loneliness. *Current Directions in Psychological Science*, 12, 71-74.
- Cohen, S., & Wills, T. A. (1985). Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 2, 310-357.
- Costa, P.T., & McCrae, R.R. (1992). Revised NEO personality inventory and NEO five-factor inventory: *Professional manual*. FL: Psychological Assessment Resources.
- DeNeve, K. M., & Cooper, H. (1998). The happy personality: a meta-analysis of 137 personality traits and subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 124(2), 197-229.
- Diener, E., & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 653-663.
- Erikson, E.H.(1959). Psychological issues Identity and the life cycle. Universities Press, Inc. (小此木啓吾・小川捷之・岩尾寿美子 (訳) (1973) 自我同一性：アイデンティティとライフサイクル 東京 誠信書房.
- Emmons, R. A. (1986). Personal strivings: An approach to personality and subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1058-1068.
- Hayes, N., & Joseph, S. (2003). Big 5 correlates of three measures of subjective well-being. *Personality and Individual Differences*, 34(4), 723-727. doi: 10.1016/S0191-8869(02)00057-0.
- Havighurst, R.J.(1953). Human development and education, New York:Longmans, Green.(ハヴィガースト,R.J. 荘司雅子・他 (共訳) (1958) .人間の発達課題と教育—幼年期から老年期まで 牧書房).
- 川瀬正裕・松本真理子 (編) . (1997) .新自分さがしの心理学—自己理解ワークブック ナカニシヤ出版.
- 厚生労働省 (2002). 平成 14 年労働者健康状況調査の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/saigai/anzen/kenkou02/index.html>
- 京都大学男女共同参画企画推進委員会 (落合恵美子編集) . (2008) .「京都大学男女共同参画推進に関する意識・実態調査」から.京都大学女性研究者支援センター (編) 京都大学男女共同参画への挑戦 明石書店 pp.304-376.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of

intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.

Ryff, C.D., & Keyes, C. L. M. (1995). The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 719-727.

高尾兼利. (1993). 発達のプロセスⅡ—青年期以降—平山論・鈴木隆男（編著）発達心理学の基礎 ミネルヴァ書房 pp.99 - 115.

Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., Morling, B. (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 741-754.

Yoshimura, K., Nakamura, K., Ono, Y., Sakurai, A., Saito, N., Mitani, M., Yamauchi, K., Onoda, N. & Asai, M. (1998). Reliability and validity of the Japanese version of the NEO five-factor inventory (NEO-FFI): A population-based survey in Aomori prefecture. *The Japanese Journal of Stress Sciences*, 13, 45-53.

付記

本研究は京都大学文学部 GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」及び京都大学女性研究者支援センターの支援を受け実施されたものである。支援をいただいた京都大学文学部 GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」及び京都大学女性研究者支援センターの皆様、そして、調査紙及びインタビューにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

2008 年度京都大学における男女共同参画に資する調査研究「研究者のウェルビーイングー対人関係がパフォーマンスと精神健康に与える影響ー」（研究代表：近藤（有田）恵）による成果である。

【メンバー】

近藤(有田)恵（京都大学こころの未来研究センター 特定研究員）

大石高典（京都大学こころの未来研究センター 特定研究員）

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター 助教）

平石界（京都大学こころの未来研究センター 助教）